毎月一回15日発行 昭和51年２月15日発行・第73号（昭和45年９月４日第三種郵便物認可）

リベルテール

2月号

Libertaire VoL, Ⅶ. No. 3

無　政　府　主　義　誌

昭和45年9月4日第3種郵便物認可
昭和51年2月15日発行第73号
リベルテール　定価一〇〇円（郵便料共）

■リベルテール　Le Libertaire
■1976年２月15日　発行　VoL, Ⅶ No. 3
■編集兼発行者　三浦精一
■発行所　東京都練馬区大泉学園町２１９０
萩原晋太郎方　リベルテールの会

毎月１回15日発行 振替 東京１３３８３０番 三浦精一

今月のことば

ロッキード社献金事件
米国では各自が武器を執って自衛する。
――ブルードン説――

日本では寄ってたかって組（企業）を防衛する。個人は無だ!?
――莫空人説――

およげ！利権亡者くん
霧は深いよ、捕まらないぜ。
たまにはピーナッツ喰はなけりや
お腹のアンコ（資本主義の余力）が腐ってしまう。

無題
腹を切るべきか、切らざるべきか
さても病に倒るべきか
それが問題だ。
――現代の国士フールスタッフー

民衆の正義！民衆の正義！
――ミハイル・バクーニン――

日共スパイ査問事件
風と共に去りぬ！
――米国より――

目次

巻頭言　消化して本物にせよ――損悟空――1
リバタリアン社会主義の経済学(1)　坂入純二――2
クアラルンプールの刑務所　三浦精一――7
綿引さんの手紙（付自筆）――11
笑龍に低頭する　添田知道――13
野火――15

巻頭言

消化して本物にせよ

損悟空

山崎豊子その他の盗作は話にならないが、国木田独歩の「運命論者」のストーリーをまねた小説や剽が多い。やはり、エピゴーネンは二流だ。独歩を越す事はできない。然しイデアを完全に咀嚼し消化した上での発想は異なる。

ドストエフスキーの「カラマゾフ兄弟」は、ユーゴーの「レ・ミゼラブル」に影響されている。そしてトルストイの「復活」は、ドストエフスキーの「罪と罰」に影響されている。これを笑う人はいない。三上於菟吉の「雪之丞変化」はモンテクリスト、大仏次郎の「鞍馬天狗」の初期作はスカーレット・ピンパアネルの翻案だ。吉川英治の「燃ゆる富士」はボアゴベの「武士道」を、白井喬二の「珊瑚重太郎」はアンソニー・ホープの「ゼンダの囚人」を素材にしている。そしてそれらは立派に独立した作品になって、人々を楽しませてくれる。

文学談議はこれ位にして、思想の面ではどうか。

戦前の無政府共産党のテーゼは、クロポトキンとレーニンをたして二で割ったようなものだったという。またハギシンが七年前に書いた「アナルコサンジカリズム」は、刺身と味噌汁をオカズにバタパンを食うような不消化なものだった。新興宗教の教祖は、色んな教典から抜き出してコネクリ上げ、「釈迦も俺と同じ事をいった。キリストのいった事は俺と同じだ」と、権威を借りて己を権威づけ、尤もらしく見せようとする。大沢正道は、レーニン、スターリン、毛沢東、カストロに学べ、といい出す。これでは困る。

樽井藤吉の東洋社会党運動は、従来アナキズムとは無縁という評価がされていた。だが結党の前年か、彼は西洋虚無主義のテロルを排し、老子を軸とした東洋虚無主義を宣言している。また、東洋社会党のテーゼはスチルネルのアナキズム思想に酷似している。こうした点から彼はすでにアナキズムに深い理解を持っていたと思われる。我々はクロポトキンでもいい、バクーニンでもいい十分に咀嚼し消化し、それをいかに広めるか、また現在社会に対処していかなる戦略をとるべきか、を考えなければならない。

中途半端な受け売りは自滅のもとである。

リバタリアン社会主義の経済学 (1)

坂入純二

一

少し時間をかけてヘンリー・D・ディッキンスン（以下デ氏と略す）の提唱するリバタリアン社会主義の経済学を紹介しようと思う。この一文はその紹介にあたっての前おきであると同時にデ氏以降をも視野に入れることになるが、力点は後の方にある。

本誌の昨年十月号の巻頭言で無署名氏が、アナキストは古典的なブルードンのほかに経済学をもっていない、そこでアナキズムの立場から労働価値説でもなく効用価値説でもない、新しい価値説を生み出さなければならない、と主張されている。主張の眼目はつまるところアナキズム経済学を樹立せよということに帰するであろうがこうした主張は強力ではないが根強くかなり以前からあるようである。たとえば、八太舟三の論文に「われらの経済学を樹立せよ」という標題のものがあることは周知の通りである。

なぜ「われらの経済学」や「アナキズム経済学」を樹立せねばならないのであろうか。俗に経済学といえば近代経済学とマルクス経済学とを指すが、それらをもってアナキズムの経済学に代用することはできないのであろうか。できるにせよできないにせよ、それはなぜなのか。こうした疑問を解く一助としてデ氏の経済学のエッセンスを紹介したいと思う。誌面に大きな制約があるので、さしあたって以下の諸論文のみに限定することとし、A論文のみは今号に訳出しておく。

A 『社会主義の経済学』の序文
B 「社会主義の経済問題」
C 「社会主義の経済的基礎」
D 「社会主義コミュニティにおける価格形成」

BCD論文の解題は訳出のつど付す。

二

デ氏について詳細なことはわからないが、留保づきではあるとはいえ、経済学は合目的技術的に利用しうると考えるから、このことはあまり重要ではない。著書はきわめて数少く『社会主義の経済学』（一九三九年。近年＝プリントされた）など数冊、論文も前出以外には数篇しか私にはわからない。これらの著述のほとんどが一九三〇年代に執筆されたものであることに注目したい。私がこれから紹介しようとするデ氏の著述は主として一九

三〇年代に欧米の経済学界で起った大論争に関するものであって、とりわけ『社会主義の経済学』はデ氏の理論の集大成というにとどまらず、この論争における最高峰の一つとされている。デ氏はこの著述において自己の構想する社会主義を「リバタリアン社会主義」と命名するが、その当該部分はB論文を参照してほしい。

欧米におけるこの論争は少し遅れて日本の経済学界に輸入されることとなったが、時代のせいもあって、同一のテーマの研究はもっぱら昭和二〇年代の前半に集中し数年にしてひとまずピリオドが打たれたようである。この紹介の過程でデ氏も日本へ移入され、その著『社会主義の経済学』については、久保田明光「計画経済における農業 ― ディッキンスンの『社会主義の経済学』（一九三九年）を読む ― 」が『理想』昭和一五年四月号に発表された。

リバタリアン社会主義という名称を使用したのはデ氏だけであったかもしれないが、今ではデ氏と同様の他の理論を包括する総称として用いられている。これは多くの別名をもち、それぞれにこのタイプの社会主義の特徴を反映するのであるが、例をいくつかあげると、競争的社会主義、市場的社会主義、分権的社会主義、リベラル社会主義、ランゲ＝ディッキンスン＝モデル、ランゲ＝ラーナー＝モデル、競争的解決などがあり、代表的な理論家としてはデ氏以外に、若きランゲ、ラーナー、テーラーらがあげられる。これに対立しているのが強制的社会主義、集権的社会主義などである。

ところで、後述するように、右の論争はもっぱらいわゆる近代経済学の間で行なわれ、マルクス経済学の側からはほとんど関与していない。主要な論点は、社会主義はうまく機能するのか、計画経済は可能なのか、経済計算は可能なのか、であった。こうした疑問に肯定的な解答を与えたのがリバタリアン社会主義とその潮流であり否定的な解答を与えたのが、ハイエクを筆頭とする古典的な自由主義経済の擁護者であった。だが、肯定といい否定といっても、両説には根本的において共有するものがあり、そこにマルクス経済学者が積極的に論争に参加しなかった一因があると思われるのだが、それを一九世紀の社会改良家と呼ばれるラスキンにならって「経済学の第一原理」と呼称できるであろう。この第一原理をアナキズムもまた分有するのであり、だからこそ社会主義は経済的に不可能であるとする最大の理論家、ハイエクをその者『隷従への道』とともにアナキズム思想史に登場させる（J・ストーン）ことも可能であるし、そのかぎりで異論をはさむ余地はないのであり、このことと経

済理論におけるリバタリアン社会主義の一員としてハイエクを数える見解（桜井一郎氏）を明確な誤謬と却けることとは何の矛盾もないのである。もっともハイエク自身のリバタリアニズムについての理解（東京新聞76年1月6日）は消極的すぎる。

ここでリバタリアン社会主義の訳語について一言しておく。第一に「自由主義的社会主義」、これは前出の久保田明光氏など。第二に「自由制社会主義」、これは土屋清氏など。なお、「自由制社会主義の経済理論」というサブタイトルのあるJ・ミードの邦訳書もあるが、これは「リベラル・ソーシャリスト」の訳であって、古典的な意味での自由主義経済の理論にかなり近いようである。（一説によるとアナキズムを意味する奴隷の言葉とされる「リバタリアン」については未完ながら「〈リバータリアン〉の起源と訳語に関する一考察」（『アナーキ』7号を参照されたい）。

デ氏の考えるリバタリアン社会主義の構造についてはB論文に詳しいが、以下に『社会主義の経済学』の序文のうちアクノリッジメントを除いた部分を訳出しておく。デ氏の意図が奈辺にあるか、大体のところは指定できるはずである。

本書の目的は、経済的自由（労働者と消費者の）と経済的平等という一対をなす公準にもとづく社会における人間の欲求を充足するために人間の生産活動を組織化することにからむ基本的な諸問題を、近代の経済科学に徴して研究することである。研究をすすめるうちに、価格制度に関する基本的な諸争点が提起される。社会主義コミュニティにとって価格決定過程のもつ重要性がとりあげられ、価格決定（プライスィング）と経済計画（プラニング）の相関関係が論じられる。著者は、個人が自由に職業と消費を選択することを基礎づける価格決定過程が社会主義コミュニティにとって意味することの重要性を、そうしたコミュニティによってそれが実際に採用される可能性を信じている。かくして、自分のテーマを展開しているうちに、著者は三つの相異なる思想の潮流と論争するのである。第一に、「潤沢の時代」を科学的ないしは技術的に主張するものたち。彼らによると、稀少性それゆえ価格決定の問題は合理的に計画化された社会には存在しないであろう。第二に、全面的か部分的かはともかく、社会主義コミュニティにおける地代や利子というカテゴリーに関連するものを拒否する社会主義者たち。第三に、社会主義の下ではすべての合理的な経済計算は不可能であるから、社会主義は実現不可能な理想であると断言する経済学者たち。

本書における著者の元来の目的は純粋の経済理論に貢献することではあったけれども、このテーマを展開しているうちに気づいたのは、こうした諸目的に徴して、いよいよますます経済活動の諸目的を考慮に入れ、経済計画や市場といった制度上の諸企図の重要性を考慮せざるをえなくなった、ということである。こうして著者はヨリ広範な社会的（ときとして政治的と称される）諸要素と経済的諸要素との相関関係に絶えず留意せざるをえないようになった。だからこそ、福祉、自由、平等といった基本的な諸概念が、経済的側面のみならずヨリ全般的な社会的側面においても、ここで論じられているのである。著者が社会の目標について若干の仮定をもとに論をすすめねばならなかったのは不可避的なことである。だから、当初から明白になるであろうが、本書は、社会的集団的な行動の究極の目的は個々の人格の発展のための機会を、それが他のすべての個々人の平等なる機会と両立しうるかぎりで、拡大することであるという自由主義（リベラル）、民主主義的仮定にもとづいているのである。

三

デ氏の思想はフェビアン社会主義の系統に属するようであるが、このことはC論文の冒頭から、あるいはD論のタイトルに「ソサイァティ」や「ステイト」ではなく「コミュニティ」が用いられていることからもうかがわれるし、社会的費用論で注目を集めるW・カップもそのような系統のなかにデ氏を理解しているようである。

フェビアン社会主義とアナキズムとは交錯するところがある。初期の中心的人物のダヴィッドソンは基本的には倫理的アナキスト共産主義者であったが、すべての改革は自己改革を基礎にしているとした（M・ベア）といわれるし、ウェッブ夫妻とならんで代表的なフェビアン、J・B・ショーの戯曲『人と超人』では冷笑的とはいえアナキストを好意的にあつかっているし、後にわずかしか読まれなくなった論文「アナキズムの不可能性」も題名から受ける印象とはややかけ離れた内容をもっていることなどはその傍証となるであろう。もっと多くの例証を指摘することもできようが、こうした雰囲気のなかでフェビアン社会主義の経済学は政策的倫理的性格をアナキズムと通有することとなり、そのいちぢるしい一例をフェビアン協会の需めに応じて書きあげられたコール『社

会主義経済学』のなかにみることができる。社会主義経済学とは、日常生活の経済的事象に倫理的諸原理を持ちこむことに関係する研究をいうのであって、その対象は本来稀少であるか、あるいは人間の努力と創意の支出によってのみ創出され得る財貨や用役の生産と消費の全過程に関連をもつよき生活様式であり、たんにある一定の基礎的諸条件のもとで何が生起するかを記述し、分析するための試み（経験科学と読み代えよ）であるばかりでなく、さらに社会ならびにその成員の一般的福祉のために、何が生起しなければならぬかを発見するための試み（規範科学と読み代えよ）である。あらゆる人に対してあらゆるものを彼が欲するだけ取得させることを許すほどに富裕でない社会において、財貨や用役の何らかの価格決定は、択一的充足の形態においていずれを選択するかの個人的自由を保証するための最善の仕方であろう。先のデ氏のA論文と右のコール経済学に共通するいくつかの要素を読みとれるであろうが、両氏はこうした意図の下に経済学を展開する。そこに多くの問題点が含まれていることは否定できないし、特にマルクス経済学からはきびしく批判されると思われるが、「社会主義経済学が真髄においてその一分科である倫理学」（コール）というフレーズはクロポトキンを喜ばせるけれどもマルクス主義の忠実な使徒のとうてい容認できないところであろう。

さて、アナキズムの経済学は消費基本の経済学であらねばならないと言ったのは八太舟三であった。ショーは分配理論として仕立てあげられた社会主義を、マルクスは生産理論として仕立てあげられた社会主義を説いたと言ったのはM・ドッブであった。ここからアナキズム――消費、フェビアン社会主義――分配、マルクス主義……生産という図式ができあがり、記憶するには至便であるが、この図式には落し穴はないであろうか。

推理小説（邦訳あり）も執筆したコールはフェビアン社会主義者としてよりもギルド社会主義者としてヨリ著名であるが、とてつもない多産な著述家だけにさまざまの顔をもつのもやむをえない。ある方面から観察すると、ユーゴスラヴィアの労働者評議会の思想はまさにコールらのギルド社会主義と同じものである（関嘉彦氏）という。そこまで断言できるかは疑問なしとしないが、社会の形態だけでなく機能をも俎上にのせるとき、リード、ウドコック、ウォードなどの同国人よりもはるかに説得的である。

四

以上でデ氏についての周辺的な解説を終える。死んだ子供の年を数えてもはじまらないが、もしリバタリアンという言葉についての認識があったなら、社会主義経済論争は日本へどのような形をとって輸入されたであろうか。どのような形をとるにせよ少なくともアナキズムが「自由」に関する三百代言としてのみ発言力をもち（客観的にみるなら）それでもって能事終れりとする風潮が現在ほどひどくはならなかったと思うのは私だけではあるまい。次にデ氏の参加した近代経済学による社会主義経済論争を概観したい。近代経済学はブルジョア経済学である、だからただ否定すればよいとする独断があるとするなら、ランダウアーが高く評価し、思想的にはブルードンやオーエンと同一系譜に連なるS・ゲゼルをケインズが激賞したいという事実をどのように解釈するのであろうか。ただ否定すればよいのはこうした独断であり独断にもとづく孤高の理論である。

そしてなお、「経済学の第二の危機」（J・ロビンソン）を見すえつつ、伝統的な近代経済学とマルクス経済学に対して、クロポトキンや八太舟三の社会生理学に代表されるアナキズム経済学がいかにコミットしているか、しうるのか、アナキズム経済学とは一体何なのか、その展望を試みたいと思う。（つづく）

クアラルンプールの刑務所

これは大門一樹君が「経済往来」の今年一月号に書いた短い随筆の題名である。大門君は一つの随想として、さりげなくこの一文を書いているのだろうが、この文があつかっている「罪の意識」の問題は、私にとっては深く、身にも心にもしみこんだ問題であった。思い出すのは少年の日、小学校からの帰り途、光晴寺の鐘の音が町にひびくとき、私は友だちからわかれて寺に急いだ。幼年の日、いつも祖母につれられて詣った寺だ。罪の意識になやむ少年の心を刺す説教に、思わずも手をあわせて老人たちとともに念仏をとなえた。

キリスト教徒になったのは中学の一年のときだった。由木康氏（パスカルのパンセの訳者）の話に感動してからだった。説教に心刺されたからとて、それだけで良くならない自分への失望があったからでもある。まだ嘆異抄も読んでいなかったし、他力本願の要諦も分らなかった。私がキリスト教に求めたものは全知全能の神の力という他力に外ならなかった。罪の意識を神によって解消したかったのである。そして真剣に聖書を読んだ。新約聖書のロマ書で、使徒パウロは罪の問題にとり組んでいる。法律以前から罪は存在した。一人の人アダムによっ

て罪は世に入った。しかし法律が無ければ罪にはならない。律法が入って来て罪が生じたとパウロは言い、彼自身の深い罪のなやみを「この死の身体」と呼んでいる。

私たちは律法の下にしばりつけられて生きている。風俗や習慣として、生れ落ちて以来その中に私たちを包みこむ社会の律法。そして毎年議会からおびただしく製造され、微に入り細をうがって国民をしばる国家の法律。パウロが言うように、法律は罪を増すために来た。法律の増すところ罪も増すのである。

大門君がここで言う「罪の意識」は、もちろん、私がなやんだ社会的な、律法に関連したものでなく、国家の刑法上の罪に関連したものである。しかしこのように律法を二分して考えたところで、国家の中で生きている私共の中の「罪の意識」は、すっかり入り組んだものになっており、微妙なところに行くと、国が違い、生活習慣が異なれば、それぞれに食い違うのである。大門君が冒頭にあげたフィリッピンのバシラン島のゲリラたちの明るさなども、国家権力の滲透していない世界に住む人たちの明るさで、所有権を立法化し、利息を合法化して盗奪を権利としている社会に住む者には理解を超えたものである。

クアラルンプールの刑務所に服役している「囚人たちは意外なくらいノンビリした表情で暗い影がない」と書き、「クアラルンプール、それはジャングルが大きな部分を占めているというマレー半島の一点だ。ジャングルが国土の大きな部分を占めているマレーである。その周辺の農村、そこには単純で簡単な自然生活がある。〃窃盗〃――そこではそのような事態は無縁の生活だ。農村から来た単純な労働者が、酒、女、トバク、料理などのあるクアラルンプールという都会に来て、衝動的な欲望に動かされる。欲しいものをとればそれが〃窃盗〃という罪名に該当することをかれらは知らされるのであろう。かれらが背負わされた〃犯罪〃というものや、そして、〃刑務所〃という建物におくられてそこで生活することは、かれらにとって何を意味するのか。日本人が観念している犯罪、刑務所とは同じものではなさそうだ」と書いている。そして最後に「この数年、体制とか国家は自分たちを抑圧するものといった観念が学生運動でしきりに流布され、非行少年の意識調査によると「社会に不満」が多い。こうなると、澄んだ目をした万引少年などが輩出してくるわけである」と結んでいる。

この窃盗といったことも、文明の進んだ国においても観念は決して同じではない。シナで物を盗んだり、カッ払って追いかけられ、つかまりそうになってその盗んだ

ものを捨てて逃げる。物が返えればもともとで、それ以上追及しない。追及するのは間違っている。日本人のように盗む行為自体を罰しようとはしない。物の移動だけに限定するからだ。同じような考え方はイタリアにもあるという。大戦中イタリアに進駐した米軍の軍属が話していた。カッ払いが多いが、追かけて捕えかけると物を捨てて逃げ、ゆうゆうと胸を張ってオーソレミオなどを歌いながら去って行くと。他の国にもこうした考え方の所は多いだろう。「罪と意識」はこのように、国により生活習慣によって異なっている。国や資本家が税をとり（持てる者から薄く、持たぬ者から厚く）、利息をとり利潤をとるカラクリが公正だと言えるだろうか。

一番手近な例は農民を見るが良い。汗水たらして作った農作物は市場価格で取引されて時には運賃はおろか、肥料代も出ない。肥料代や農器具はと言えば、工場生産原価プラス利潤を価格にして売りつけるから決して損はない。工場生産原価の構成は原価消却費から何から何まで万全の構成だ。そして新しい農器具を買った農民は、そのまま借金となってそれを払うために出稼ぎせねばならない。農民がその生産物に、この原価計算を適用したらどうなる。農産物は当然高くなる。そうしたら労働者の生活費も高くなるだろう。労働原価を上げる。すると生産物が高くなる。こうして経済は悪循環を繰返すことになる。だから農民の犠牲において悪循環からまぬかれているということにならないか。国家権力による合法的盗奪ではないか。

「罪の意識」を持つべきはずの資本家や権力者は法律によって保護されて、全然「罪」を意識せず、切迫して盗んだ者は刑務所に送られて「罪の意識」を強要される。これが現代社会の現実ではないか。労働組合運動も、この経済の悪循環を正視しなくては決して革命的ではあり得ないはずだ。アナーキストが社会革命というのは、ここにある。（三浦）

〃破壊の熱望は創造の熱望と同じである〃

―ドイツにおける反動より

一八四二年 Deutsche Jahrbucher für Wissenshaft und Kunst 5号にジュール・エリサールの仏人ペンネームで掲載されたバクーニンの表記論文の最後の句が出典である。前文では〃われわれは永遠の精神（ewigen Geist）を信じよう。それは破壊し創造するが、それこそ全生命の不定形にして永遠の創造の源泉だからだ。―破壊の熱望は創造の熱望と同じである。〃

永遠の精神が自知できなければその破壊はアニメーション映画のゴジラの破壊のようなものでバクとは無縁です。

Y記